

「時間です！」

時の声—自己の誕生」

A. 時間への問い

自己への問いのきっかけ

存在への問いの背景

歴史の意義への問いの原動力

B. 時間の非本来的理解

I 通常の時間の理解

1. 日常的な時間観:「時間です」

始めと終わり—持続—繰り返しとしての時間

2. 無常の次元—進歩と崩壊の場—永劫の回帰

3. 対象化された時間: 中立的時点の連続(古典的科学)

II 時間の哲学的解釈

1. 「永遠の像」(プラトン主義)と「運動変化の形式」(アリストテレス主義)の間の時間の存在

2. 魂における時間の理解と測定(アウグスティヌスからカントへ)

3. 充満した時間: 瞬間・カイロス・時(聖書;キルケゴール以来の実存哲学)

III 持続としての時間の問題性

1. 空間形式を通して観察された時間(ベルグソンを参考に)

2. 決定論的な時間像への傾斜

3. 主体性の忘却

4. 時間の事物化

IV 持続としての時間論に対する批判

1. 時間の遇存性・非必然性

2. 持続の成立根拠: 始めではなく起源への問い

3. 時間流に対する「今」の先駆性(トマス・アクィナス;フッサール)

C. 「今」を起源とする時間・存在論

I 「今」の根源性・普遍性

1. 一般概念にならないで洞察可能な現実存在である「今」

2. 還元・解消不可能な「今」

3. 過去を受け入れて乗り越える場としての「今」

4. 可能な未来に向かって自己相対化し、開かれた「今」

5. 持続の起源と包括的な場としての「今」

II 「今」の自己成立と現実そのもの

1. 成起である「今」:「元」

2. 存在する万物の起源である「今」:(根)「源」

3. 顕わをもたらす「今」:「現」

4. 世界を共通の空間として開く「今」

Ⅲ 「今」それ自体

1. 「今」の無制約で比較不可能な偉大さ
2. 「今」の徹底した無性と無底の奥深さ
3. 到来する現在としての「今」
4. 「今」における起源性と究極性の一致

D. 「今」による人間・存在論

I 人間という時間内の存在

1. 命の源である「今」
2. 時間意識の起源である「今」
3. 自己現在化する「今」による意識と存在への開放
4. 時間意識の「今」に対する従属性とそれに対する遅れ

II 所与である「今」

1. 要求不可能で根源的な賜物である「今」
2. 存在の自己贈与を媒介する「今」
3. 自己同一性を引き起こし、自由な自立を支える「今」
4. 行為を集中させ、苦悩を貫く「今」
5. 過去を遮断し、自己を無所有の主体として生み出す「今」
6. 未来への投影を促すと同時に、自己を後の「今」に服従させる「今」
7. 存在自体に接触させる「今」
8. 可能性を提供し、意義を照らす「今」

Ⅲ 呼びかけであり、同意の受け手である「今」

1. 創造してくれる意志の現存である「今」
2. 延期を許さない呼びかけである「今」
3. 権威ある意志に直面させる「今」
4. 自らへの脱出と結びつきを要求する「今」
5. 無制約的なものに向かって呼び出す「今」—根本決断の可能根拠
6. 「今」に先行する無制限な現存に到らせる「今」
7. 時間流の中にゆらぐ自己を支えて確立させる「今」
8. 過ぎ去る時間の只中に自己を、永遠なる存在への受容的・能動的自己高揚に招く「今」

Ⅳ 課題の源である「今」

1. 自己超越とともに、へりくだる自己無化を促す「今」
2. 具体的で唯一無二の課題を指示する「今」
3. 責任を呼び起こし、課題に集中させる「今」
4. 存在論的かつ実存論的真理の自明な声である「今」

V 「まだ」でもある「今」

1. 課題の実現可能性を確信させる約束である「今」
2. 究極的現在への希望を生じさせる「今」
3. 語りかける第一根源の隠蔽性を守る「今」
4. 自らを打ち消し忘却させる「今」—暗闇の中で信仰を点火し、観想の目の開く「今」